宮川　実

資本論講義

別巻

『資本論』の方法

青木書店

資本論講義〔全4巻・別巻1〕 別巻

1969年3月15日　第1版第1刷発行
1975年9月25日　第1版第6刷発行
定価は函・売上カード に表示

著者　宮川　実
発行者　山根　襄

発行所　株式会社　青木書店
東京都千代田区神田神保町1—60
振替・東京36582番
電話・東京292局0481番(代)

(分) 3033 (製) 4360 (出) 0015

序　文

一九六七年は『資本論』第一部が出版されてから一〇〇年目にあたったので、わたくしもそれを記念してこの『資本論講義』を書きはじめたが、一〇〇周年を境にして日本の労働者階級の『資本論』学習運動が急速に発展し、東京、横浜、大阪、京都、秋田、札幌など多くの都市で資本論講座が開かれることとなった。わたくしは、東京と横浜の資本論講座で講師をつとめたが、東京の第一次、第二次講座ともに、聴講者は三〇〇〇人近く、その大部分は労働者諸君で、各大学の学生諸君も三〇～四〇人くらい参加した。いま第三次講座の開講中である。科学的社会主義の古典中の古典である『資本論』を読むことは、久しいまえから日本の労働者諸君の夢であったが、いまやその夢が実現されはじめたのである。

こうしてわたくしは、六七年と六八年とを、労働者諸君とともに『資本論』を読んでくらしたが、この貴重な経験がこの『資本論の方法』を書くわたくしの計画に大きな影響をおよぼした。わたくしは、『資本論講義』を書きはじめたころには、この『資本論の方法』では、『資本論』にかんする国際的・国内的な論争を取扱うつもりであった。『資本論』にかんしては、古くから国際的・国内的に多くの論争がおこなわれた。商品と価値についても、貨幣についても、労働力の価値についても、資本蓄積の一般的法則についても、社会総資本の再生産と流

通についても、平均利潤率の法則についても、信用についても、地代についても、国際的・国内的に多くの論争がおこなわれた。これらの論争を回顧することは、『資本論』の正しい理解のために大きく役立つにちがいない。そのため、わたくしは、この『資本論の方法』では、これらの論争を回顧しそれを批判するつもりで、内外の資料をあつめ、ノートをつくっていたのである。

ところが、労働者諸君といっしょに『資本論』を学習しているうちに、『資本論』の学習を日本の解放運動に役立たせるためには、国際的・国内的な諸論争の回顧よりも別のことが当面もっと重要だと思うようになった。ちょうどわたくしは、『資本論講義』につづいて『剰余価値学説史』（マルクスまでとマルクス以後との二巻）を出版する予定なので、『資本論』にかんする内外の諸論争のくわしい紹介と批判はこの『剰余価値学説史』の下巻にゆずり、この『資本論の方法』では、『資本論』の学習を日本の解放運動に役立たせるために必要な、重要な、若干のことだけを書くことにし、内外の諸論争については、ここで取扱う重要な若干の問題を正しく理解する上で必要なかぎりでのみ述べることにした。

『資本論』の学習を日本の解放運動に役立つような仕方でおこなうには、どうしたらよいか？　偉大な革命家レーニンの指示にしたがって『資本論』を学習すればよいのである。レーニンは、その『カール・マルクス』や、『人民の友とはなにか』や、『市場問題について』や、『哲学ノート』など多くの論文で、『資本論』の学習の仕方をわれわれに教えたし、また、その『ロシアにおける資本主義の発達』や『帝国主義論』などの著作で、『資本論』の方法をもちいて、十九世紀後半のロシアの資本主義と、二十世紀はじめの世界資本主義の独占段階とを、分析した。レーニンは、もっともすぐれたマルクス主義理論家であるとともに、マルクスの理論を導きの糸とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

てロシア革命を実践し成功させた偉大な革命家である。だから、わたくしは、『資本論』を日本の解放運動の導きの糸にするために学習しようとおもうならば、レーニンの指示にしたがって学習するのが、もっとも正しい、もっとも効果的な仕方である、と考えるのである。そこでわたくしは、この『資本論の方法』では、『資本論』の学習の仕方についてレーニンがなにを教えたかを、考えてみることにしたのである。

レーニンがわれわれに教えた重要な点は、つぎのとおりである。

㈠　レーニンは、『哲学ノート』のなかでつぎのように書いた。「ヘーゲルの『論理学』の全体をよく研究し理解しなければ、マルクスの『資本論』とくにその第一章を理解することはできない。だから、マルクス主義者のうちだれも、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかったのである」（『全集』第三八巻、一五〇ページ、岩波文庫版、Ⅰ一五七ページ）。これは、『資本論』を理解するには弁証法の知識が必要だということであるが、こんにちでは弁証法は、ヘーゲルの観念論的弁証法から観念論的外被をとりさったマルクス、エンゲルス、レーニンの唯物弁証法がまとまった形で存在している。だから、われわれは、レーニンのこの言葉を、『資本論』を正しく理解するためには唯物弁証法の理論を導きの糸にしなければならない、というように読んでよいであろう。

㈡　それでは唯物弁証法にしたがって『資本論』を読むとはどういうことか？　レーニンは、『弁証法の問題によせて』という短文のなかで、つぎのように言っている。「一つの統一的な全体を二つに分け、その矛盾した二つの部分を認識することは、弁証法の本質（『本質的なもの』の一つ、唯一の基本的な特性あるいは特徴ではないにしても、その一つ）である。……対立物の同一性（対立物の『統一』というほうが正しいかも知れない。もっとも同一性と統一という用語のちがいは、このばあいには重要ではないが。ある意味では両方とも正しい）

とは、自然（精神および社会をもふくめて）のすべての現象と過程のうちに、矛盾した・たがいに排斥しあう・対立した傾向をみとめること（発見すること）である。世界のすべての過程を、その自己運動において、その自発的な発展において、その生き生きとした生命において、認識する条件は、それらを対立物の統一として認識することである。発展は対立物の『闘争』である。……マルクスは、『資本論』のうちで、まず最初に、ブルジョア社会（商品生産社会）のもっとも単純な、もっとも一般的な、もっとも基本的な、もっとも大量的な、もっとも普通な、ひとびとが何億回となく出くわす関係、すなわち商品交換を分析する。分析は、このもっとも単純な現象のうちに（ブルジョア社会のこの「細胞」のうちに）現代の社会のすべての矛盾（あるいはすべての矛盾の「萌芽」）をあばきだす。それにつづく叙述は、これらの矛盾とこの社会の発展を（成長をも運動をも）、その個個の部分の総和において、初めから終りまで、われわれにしめす。このような仕方がまた弁証法一般の叙述の（あるいは研究の）方法でもなければならない（なぜならマルクスにおいては、ブルジョア社会の弁証法は、弁証法の特殊なばあいにすぎないからである）。……弁証法はまさに、（ヘーゲルと）マルクス主義の認識論である」（『全集』第三八巻、三二六―三二九ページ、岩波文庫版、Ⅱ一九六―二〇〇ページ）。

㈢　レーニンはまた、『人民の友とはなにか』のなかで、『資本論』の骨組みを説明してつぎのようにいった。

「マルクスは、一八四〇年代にこの仮説（史的唯物論の理論）を述べてから、材料の事実的研究にとりかかっている。かれは、一つの経済的社会構成体（商品経済制度）をとって、膨大な資料にもとづいて（この資料をかれは二五年以上も研究したのだ）、この構成体の機能と発展との法則のきわめてくわしい分析をあたえている。この分析は、社会の成員間の生産諸関係だけに限定されている。マルクスは、問題の説明のために一度もこの生産

関係の外部にあるなにかの要因に頼ることなしに、社会経済の商品的組織がどのようにして発展するか、その組織がどのようにして資本主義的組織に転化し、ブルジョアジーとプロレタリアートという敵対的な（すでに生産関係の範囲内で）階級をつくりだすか、その組織は、どのようにして社会的労働の生産性を発展させ、そして、まさにそのことによって、この資本主義的組織そのものの基礎と和解しえないまでに矛盾するようになる一要素をもちこむか、ということを知る可能性をあたえている。これが『資本論』の骨組みである。

だが、重要な点は、マルクスがこの骨組みだけでは満足しなかったこと、かれが普通の意味での『経済理論』だけにとどまらなかったこと、かれが――ある社会構成体の構造と発展とをもっぱら生産関係によって説明しながらも――それにもかかわらず、この生産関係に照応する上部構造を、つねに、そしていたるところで、追求し、この骨組みを肉と血でつつんだことにある。このためにこそ『資本論』はきわめて巨大な成功をおさめたのであって、そこで『ドイツの経済学』のこの著書は、資本主義的社会構成体の全体を、生きた構成体として、――すなわち日常生活の諸側面や、この生産関係に固有な階級敵対の実際上の社会的な現れや、資本家階級の支配を保護するブルジョア的な政治的上部構造や、自由・平等、等々のブルジョア的観念や、ブルジョア的家族関係をともなった構成体として――読者にしめしたのである。ダーウィンと比較することがまったく当をえていることは、いまや明白である。『資本論』――これはまさに、モン・ブランともいうべき多量の事実資料に仕上げをあたえる、いくつかの、相互にきわめて密接に関連した、概括的な観念にほかならない」（『全集』第一巻、一三四ページ）。

ここでレーニンは、三つのことをわれわれに教えている。一つは、『資本論』は商品経済制度がいかにしてそれに内在する矛盾によって資本主義経済制度に転化し、資本主義経済制度がいかにして生産力を発展させ、資本

主義経済制度じしんと衝突するような状態に立ち至らせるかを、明らかにしているということである。もう一つは、『資本論』は、資本主義経済制度の発生、発展および没落の法則をただ経済的構造の分析だけによって明らかにしたということである。三つめは、『資本論』は、経済的構造の分析だけによって資本主義的経済制度の発展法則を明らかにしたけれども、経済的構造と上部構造（政治、法律、思想など）との相互作用をも追求したということである。

わたくしは、この『資本論の方法』では、レーニンのこれらの指示にしたがって、マルクスが『資本論』をどういう方法で書いたかを、考えてみたいと思うのである。

この書物は、はじめ古典の引用のひじょうに多い原稿であったが、青木書店の編集長山家豊氏の忠告にしたがって、引用文の多くをわたくしの言葉で書きなおし、全体をできるだけやさしい文章に書き改めたものである。しかし、どれだけこの作業が成功したかは、読者諸君の判断にまつほかない。

一九六八年十二月十五日

宮川　実

目次

序文〔一〕

第一章『資本論』はなにのために書かれたか ……一五

マルクスの理論の革命的性格が抹殺されている〔一五〕 『資本論』はプロレタリア党のために書かれた書物である〔一六〕 階級社会では理論が階級的性格をもつ〔一七〕 なぜブルジョア経済学は正しくなりえないか〔一八〕 小ブルジョア経済学も正しくなりえない〔一九〕 プロレタリアートの理論〔二〇〕 資本主義の運動法則の暴露はブルジョアジーに打撃をあたえる〔二〇〕 経済学は科学であるためにはプロレタリアートの立場に立たねばならぬ〔二一〕 レーニンの見解〔二二〕 ブルジョア科学は社会科学の中立性を主張する〔二四〕

第二章『資本論』はなにを研究しているか ……二七

『資本論』の研究対象〔二七〕 マルクス自身の説明〔二八〕 生産関係の型がちがうと法則がちがう〔二一〕 特殊な生産関係の特殊な法則を研究しなければならぬ〔三二〕 広義の経済学と狭義の経済学〔三三〕 ソ連の『経済学教科書』〔三六〕 生産様式は生産力と生産関係の統一である〔三六〕 労働過程〔三七〕 労働〔三八〕 労働対象〔三八〕 労働手段〔三八〕 生産手段〔三八〕 生産の一要因としての社会の生産力〔三八〕 生産の一要因としての生産関係〔三九〕 生産諸関係の中核は生産手段の所有関係である〔四一〕 生産様式〔四一〕 生産関係は物質的関係である〔四二〕 レーニンは物質的関係とイデオロギー的関係の区別を高く評価した〔四三〕 生産関係の発展を自然史的過程として研究する〔四五〕 生産様式は生産力と生産関係の矛盾によって発展する〔四五〕 生産力と生産関係の相互作用はどのようにおこなわれるか〔四六〕 生産力の発展は生産用具の発展

からはじまる〔四六〕　生産用具を発展させるものは生産関係である〔四七〕　生産関係は生産力の性格に照応しているばあいに生産力を発展させる〔四八〕　社会主義のもとでの生産力と生産関係の照応〔四九〕

第三章　『資本論』では弁証法的方法が用いられている　……五〇

弁証法的方法〔五〇〕　マルクスじしんの説明〔五一〕　『資本論』を理解するには弁証法の知識が必要である〔五二〕　ヘーゲルの観念論的弁証法〔五三〕　マルクスはヘーゲルの弁証法をひっくりかえした〔五四〕　レーニンによる唯物弁証法の特徴づけ〔五五〕　エンゲルスの説明〔五六〕　対立物の統一の法則〔五六〕　すべての事物は矛盾をふくんでいる〔五七〕　事物に内在する矛盾が発展の原動力である〔五八〕　すべてのものは連関しあい作用しあっている〔五九〕　資本制的生産関係を純粋に観察する〔五九〕　自然科学では実験をおこなうが経済学では抽象力をもちいる〔六〇〕　支配的な生産が他の生産の特殊性を修正する〔六〇〕　資本制生産の矛盾が解決されると他の従属的な生産の矛盾が解決される〔六二〕　すべての事物は特殊な矛盾をもっている〔六五〕　科学の任務は矛盾の特殊性を明らかにするにある〔六六〕　商品を生産する労働の二重の社会的性格〔六六〕　商品を生産する労働の二重の社会的性格は歴史的特殊的な性格である〔六七〕　商品にふくまれる使用価値と価値との矛盾〔六七〕　商品の矛盾についてのマルクスの説明〔六八〕　商品の矛盾は商品を生産する労働の矛盾が対象化したものである〔七〇〕　商品の使用価値は使用価値一般であるという見解〔七〇〕　商品の使用価値は使用価値一般ではない〔七九〕　労働過程は労働過程一般だとする見解〔八一〕

第四章　『資本論』では発達した産業資本主義の経済的構造を分析する　……八六

発達した産業資本主義の経済的構造を分析する〔八六〕　マルクスの経済学篇別のプラン〔八七〕　認識の過程について〔九七〕　感覚の形成〔九八〕　知覚の形成〔九八〕　表象の形成〔一〇〇〕　概念の形成〔一〇一〕　分析と総合の活動〔一〇一〕　科学の法則〔一〇一〕　産業革命後、産業資本主義の経済的構造が確立した〔一〇三〕　発達した産業資本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

主義の経済的構造をどうして把握するか〔一〇三〕生産諸関係のあいだの内面的必然的関係は弁証法的発展関係である〔一〇四〕資本の概念を確定する〔一〇六〕産業資本が資本の基本形態である〔一〇七〕一つの産業資本の運動を考察する〔一〇九〕直接的生産過程と流通過程とを別々に考察する〔一一〇〕資本主義的生産の矛盾は生産の社会化をおしすすめる〔一一〇〕資本制的生産の矛盾は資本の蓄積をおしすすめる〔一一一〕資本の集中もおしすすめる〔一一一〕資本主義的蓄積の一般的法則〔一一三〕本源的蓄積〔一一三〕資本制的蓄積の歴史的傾向〔一一三〕

第五章　資本制的生産様式の運動法則を明らかにするために
　　なぜ発達した産業資本主義の経済的構造を分析するか(一)……一一七

一　弁証法的発展……一一七
なぜ発達した産業資本主義の経済的構造を分析するか〔一一七〕論理の展開と歴史の発展とは同一ではない〔一一〇〕歴史の発展の各段階のくわしい研究が必要である〔一一五〕エンゲルスの説明〔一一六〕

二　『資本論』冒頭の商品は論理的商品であるという見解……一一七
論理と歴史の関係の問題は日本では『資本論』冒頭の商品の性格の問題として論じられた〔一一七〕河上肇博士の説〔一一七〕河上肇博士の理論の不十分さの根拠〔一一〇〕遊部久蔵氏の見解〔一一一〕

三　レーニンの見解……一一四
小商品生産は資本主義的商品生産に発展する原動力をもつ〔一一四〕レーニンの見解〔一一五〕

(一)　農業における資本主義の発達〔一一六〕

(二)　工業における資本主義の発達〔一一九〕

四　単純商品生産は資本主義的生産に発展する原動力をもたないという理論 ……一四四
本源的蓄積の基礎過程は小商品生産の両極分解である〔一三三〕　マルクスの封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行についての説明〔一三三〕　本源的蓄積は経済外的な暴力をともなった〔一三六〕　奴隷制社会の小商品生産者はなぜ亡びたか〔一三九〕　商品生産のない商品流通があるか〔一六〇〕

第六章　資本制的生産様式の運動法則を明らかにするために
なぜ発達した産業資本主義の経済的構造を分析するか㈠ ……一六四

一　価値形態における論理的発展と歴史的発展 ……一六四
価値形態の叙述は歴史的発展の研究だという見解〔一六五〕　価値形態の叙述は論理的展開である〔一六七〕　歴史的説明は初版にはなかった〔一六七〕　簡単な価値形態は歴史の初期には不十分でなかった〔一六八〕　簡単な価値形態の商品は概念に一致した商品である〔一七〇〕　発達した産業資本主義の経済的構造を把握するために簡単な関係から複雑な関係にすすむ〔一七一〕　「交換過程」では歴史的発展を説明する〔一七四〕　ローゼンベルグの見解〔一七四〕　その批判〔一七六〕

二　『資本論』冒頭の商品は歴史的な単純商品であるという見解 ……一七七
櫛田民蔵氏の見解〔一七七〕　理論の出発点の商品と歴史の出発点の商品はちがう〔一七九〕　向坂逸郎氏の見解〔一八一〕　向坂氏は歴史上の単純商品の研究にもとづいて論理の出発点の商品を理解することが唯物論だという〔一八四〕　ここでの問題の所在〔一八六〕　価値と価値法則は歴史上の単純商品を分析しなければ把握できないか〔一八七〕　資本主義の経済的構造を分析するだけでは唯物論的立場に立つことにならないか〔一九九〕　レーニンの見解〔一九一〕

第七章　労働力の価値と価格との関係について　……一九四

労働力の価値の内容を物質的なものと精神的なものに分けている〔一九四〕　労働力の価値は文化費部分と生理的生活費部分とからなる〔一九六〕　「道徳的」とは「社会的」の意味である〔一九六〕　文化費は文化の発展につれて変化する〔一九七〕　育成費を物質的と精神的に分けるのは無意味である〔一九八〕　文化費の大きさは必要欲望の範囲によってきまる〔一九八〕　労働力では価格が価値をきめるといっている〔一九九〕　資本主義的生産と資本主義社会とをはっきり区別しない〔二〇〇〕　価値以下説とはなにか〔二〇四〕　われわれは発達した資本主義の経済的構造を問題にしている〔二〇四〕　マルクスによる資本蓄積の分析〔二〇五〕　資本論の構成が変わらないで蓄積がおこなわれるばあい〔二〇六〕　大工業の時代には資本の蓄積につれて資本の構成が変わる〔二〇七〕　産業予備軍が賃金を下げるのは法則である〔二〇八〕

第八章　む　す　び　……二一〇

事物はその特殊な矛盾によって発展する〔二一〇〕　事物の発展の各段階はすべての先行諸段階を圧縮して自己のなかにふくんでいる〔二一一〕　結語〔二一二〕

凡　例

一、『資本論』の引用でKは東独マルクス・レーニン主義研究所のマルクス・エンゲルス全集のページをしめす。㊐は、長谷部文雄訳による青木書店版のページをしめす。

例　㊐Ⅰ二〇〇　は、第一巻二〇〇ページをしめす。

一、『資本論初版』のページは、青木書店刊行の翻刻版のページをしめす。

一、『原典選書』とあるは、青木書店版『マルクス＝レーニン主義原典選書』をしめす。

一、『全集』とあるは、大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』をしめす。

資本論講義

別巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.